

Title	〈他面意識〉から考えるS know O by sightの意味 : by natureやby tradeとの接点
Sub Title	[Know X by sight] expresses awareness of different ways of knowing : comparison with [by nature] and [by trade]
Author	平沢, 慎也(Hirasawa, Shinya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.81 (2025. 3) ,p.1- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20250331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈他面意識〉から考える S know O by sight の意味 ——by nature や by trade との接点*

平 沢 慎 也

1. はじめに

現代英語の慣習的表現である [S know O by sight] は「O の見た目を知っている」ほどの意味を持つ。平沢（近刊）では、この慣習的な意味に到達する経路——パーツである know と by と sight をどのように解釈するかによって規定される経路——には大きく分けて3通りが存在することを示した。そのうちの1つは以下のようなものであった。

(1) [S know O by sight] 「O の見た目を知っている」のパーツ分解的解釈の1つ

know の解釈： 「S は、知覚領域に入ってきた人や物を正しく O として認識する（＝「あの人だ!」「あれだ!」というように知識が活性化する、ピンと来る）という動的な変化を起こすことができるだけの知識・能力を持っている状態である」

by の解釈： 「…に関しては」

sight の解釈： 「O の見た目」

本稿はこのうち by の解釈である「…に関しては」とは一体どういうことかについて、明示的・具体的な言葉で説明することを目指すものである。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節で、(1)の by の解釈は本稿独自の用語で言うところの〈他面意識〉を含んだものであるという仮説を提示する。[S know O by sight]における〈他面意識〉とはどのようなものかは2節の中で詳しく述べる。続く3節では、[S know O by sight]と〈他面意識〉の結びつきは何かの弾みでまれに生じるという性質のものではなく、かなりの程度慣習化したものであるということを、コーパス調査の結果をもとに論じる。4節では、この〈他面意識〉が[S know O by sight]以外の by の用法にも見られることを指摘し、そうした諸用法のネットワークの中に[S know O by sight]を位置付ける。5節は(平沢(近刊)の内容まで含めての)まとめである。

2. [S know O by sight]における〈他面意識〉とは

本節では、[S know O by sight]「Oの見た目を知っている」のパーツ分解的解釈としてありえるもののうち、(1)に示したものは、by sightを「(Oの持つ諸側面のうち) sight (見た目) という側面に着目して言う」とほどの意味と解釈するものであるということを示す。Oには sight 以外の側面が存在することを意識しているという点を捉えて〈他面意識〉と呼ぶことにするならば、本節の主張は、(1)の by の意味には〈他面意識〉が含まれているという主張だと言い換えられる。それでは、Oが持つ見た目以外の側面が意識されていることはどのように表面化するだろうか。いくつか例を示そう。

たとえば(2)では、見た目以外に名前という側面が意識されていることが明示されている。

(2) a. I know her **by sight** but not by name. [=I know what she looks

like but I don't know her name]

(<https://www.britannica.com/dictionary/by>)

その女性の顔は知っているが、名前は知らない。

- b. **I know him by sight** [=I have seen him], but I don't know his name.

(*Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*, s.v. *by*)

私は彼を見たことならあるが、名前は知らない。

次の例 (3) では、know by sight していることと友人であることが対比されている¹⁾。(4) では know by sight していることと話をしたことがあることが対比されている。ある人と友人になったり話をしたりすること——(広義の)知り合いになること——はその人の (sight を含めて) 様々な側面を知ることにつながる。

- (3) a. [状況説明] 大学生の語り手は、人生に絶望し、住んでいたアパートを捨てて野宿を始める。

[...] I did not want to run the risk of seeing anyone I knew. Walking north meant Morningside Heights, and the streets up there would be filled with familiar faces. If not friends, I was sure to bump into people who **knew me by sight**: the old crowd from the West End bar, classmates, former professors.

(Paul Auster, *Moon Palace*)

[...] できれば知りあいには顔を合わせずに済ませたかった。北に向かえば、モーニングサイド・ハイツへ行くことになる。あそこへ行けば知った顔がゴマンといるだろう。友だちでなくても、顔を見て僕だとわかる人間に出くわすに決まっている。ウェストエンドのバーでの飲み仲間、同じクラスの連中、授業で見知った教授連。

(柴田元幸 (訳) 『ムーン・パレス』)

- b. [状況説明] ある殺人事件が起きた日の夜に Van Wick という男

性がブランド画廊に入ってきた時刻について、Lieutenant Columbo（警部補／刑事コロンボ）が店主に尋ねていると、受付係の Marcy が口を挟む。

Marcy: It was 9:28. I met him when he came in, Lieutenant.

Columbo: 9:28.

Marcy: Mmm-hmm.

Columbo: You're pretty sure about that time?

Marcy: I'm positive. He had a super watch that printed the time in red letters. He showed it to me.

Columbo: Oh, you **know him by sight**? Is he a friend?

(Columbo, Episode 30)

マーシー： 9時28分です。入ってこられたときにお会いしました。

コロンボ： 9時28分ですね。

マーシー： ええ。

コロンボ： それなりに確かな情報と考えてもよいですか？

マーシー： 絶対です。時刻が赤い文字で表示されるすごくカッコいい時計をお持ちだったんです。見せていただきました。

コロンボ： あ、顔を見てヴァン・ウィックさんだと分かるんですね。お友達ですか？

- (4) a. I **know** Mr. Smith **by sight**, though I've never spoken to him.
スミスさんとは話したことはないが、顔はわかります。

(『コンパスローズ英和辞典』 s.v. *sight*)

- b. I **know** Chris **only by sight**, but I've never spoken with her.
クリスの顔は知っているが話をしたことはない。

(『ウィズダム英和辞典』第4版, s.v. *sight*)

(5) では, [S know O by sight] が「だけ, しか」を表す表現 (only, not ... except ...) とともに用いられている。

- (5) a. He met another Faculty of Letters student in the lavatory, **some-
one he knew only by sight.**

(Sōseki Natsume, *Sanshirō* (translated by Jay Rubin))

顔を洗う所で, 同じ文科の学生に会った。顔だけは互いに見知り合ひである。 (夏目漱石『三四郎』)

- b. Steve didn't really **know** me except **by sight.**

(<https://www.papermag.com/mudd-club-doorman-richard-boch>)

スティーブは私のことを見た目以外はよく知りませんでした。

「だけ, しか」は実は〈他〉との対比を含む概念である (英語の only についての Langacker (1993: 324) の指摘を参照)。「話せる外国語は英語だけです」と言う人は英語以外の外国語の存在を意識しているし、「さくらんぼしか残っていなかった」と言う人はさくらんぼ以外のものも残っていることを期待していた人である。同じように, (5) では当該の人物の sight 以外の側面 (名前など) も潜在的には知り得ることが意識されていると考えられる。

「少なくとも」も〈他〉との対比を含む概念である。「少なくとも太郎は連れて行く」と言う人は潜在的には太郎以外の人も連れて行くという選択肢があり得ることを意識している人であり、「少なくとも絆創膏くらいはしておかないと」と言う人は絆創膏を貼るよりも本格的な治療を受けるのが望ましいと考えている人である。以下の例 (6) では, 「少なくとも」を表す at least が [S know O by sight] とともに用いられている。

- (6) a. 80% of sexual assault survivors **know** their assailant, **at least by
sight** (<https://actabuse.com/teens/sexual-violence/>)

性的暴行の生存者の 80% は暴行者の少なくとも顔は知っている。

- b. Her father's second wife and stepdaughter Allegra **knew**, at least by sight. (Kate Hewitt, *Engaged for Her Enemy's Heir*)

父親の二番目の妻と義理の娘をアレグラは知っていた。少なくとも顔は。

(6a) では暴行者, (6b) では父親の二番目の妻と義理の娘の, 顔以外の側面 (たとえば名前など) を知っているかはさておき, 少なくとも顔は知っている, ということである。やはり sight という側面と sight 以外の側面との対比が関わっている。

本節では, [S know O by sight] (の解釈の1つ) に含まれていると本稿が主張する〈他面意識〉とはどのようなものかを, その具体的な現れ方のパターンのいくつか——名前を知っていることとの対比, 知り合いであることとの対比, 「だけ」との共起, 「少なくとも」との共起——を例示するかたちで見えてきた。しかし, これだけではまだ, 〈他面意識〉が [S know O by sight] における意味の一部として慣習化していることは示せていない。そこで次節ではコーパスを利用して [S know O by sight] の使われ方の頻度分布を見てみたい。

3. [S know O by sight] における〈他面意識〉の慣習化

ここで利用したコーパスは, 検索日現在 (2024年6月20日) 10億語規模の現代アメリカ英語コーパスである Davies (2008-) *The Corpus of Contemporary American English* (以下 COCA) である。このコーパスで, by sight の左9語以内に know (およびその活用形) が含まれている例を検索したところ, ヒットした例は1番から「112」番まで存在しヒット件数も「112」と表示されるが, うち2つが欠番であり, さらには4つがノイズであったため²⁾, 実質的なヒット件数は106件である。

この 106 件のうち、〈他面意識〉を指摘できる例は 53 件あった。内訳としては、2 節の (2) で見たのと同種の「名前を知っていることとの対比」が示されている例が 11 件、(3) (4) で見たような「(広義の) 知り合いであることとの対比」が示されている例が 12 件、(5) のように「だけ、しか」を介して対比が示される例が 12 例、(6) のように「少なくとも」を介して対比が示される例が 7 例、その他の例が 11 例である。表のかたちで整理すると以下のようになる。

表 1 COCA における [S know O by sight] と 〈他面意識〉

〈他面意識〉の現れ方	件数
名前を知っていることとの対比が示される	11
知り合いであることとの対比が示される	12
「だけ、しか」を介して対比が示される	12
「少なくとも」を介して対比が示される	7
その他	11
合計	53

検索結果に含まれていたそれぞれのパターンの例を以下に 2 つずつ示す。

- (7) 名前を知っていることとの対比が示されている例
- a. I **know** two or three **by sight**, and have one's name, but I've never seen this man before. "Can I get your name?" I ask. (COCA)
- 2, 3 人は見覚えがあり、1 人は名前がわかるが見たことのない人だ。「名前を教えてくださいませんか」と私は尋ねる。
- b. She **knew** him **by sight**, though not by name. (COCA)
- 彼女は彼に見覚えがあった。名前はわからなかったが。
- (8) (広義の) 知り合いであることとの対比が示されている例
- a. Folks I **knew** **by sight** but had never spoken to waved and smiled. (COCA)

顔はわかるが喋ったことのない人たちが手を振って微笑んだ。

- b. You don't **know** me in person or **by sight**, but I have written a couple times or more to you by email. (COCA)
 あなたから見れば私は知り合いでもなければ見たことのある人でもありませんが、私は少なくとも2、3回はEメールをお送りしたことがあります。
- (9) 「だけ、しか」を介して対比が示されている例
- a. Riggs: What you got on the freighter homicide?
 Butters: I talked to some illegals. They only knew the shooter **by sight**. (COCA³⁾)
 リッグズ： 貨物船の殺人の件はどうなってる？
 バターズ： 不法入国者何人かに話を聞きました。犯人は顔しか知らない奴だったと。
- b. I didn't know either of them except by sight [...] . (COCA)
 どちらも見た目以外は知らなかった [...]。
- (10) 「少なくとも」を介して対比が示されている例
- a. Everyone in town knew Spike and Buffy, at least by sight. (COCA)
 町の誰もがスパイクとバフィーを——少なくとも顔くらいは——知っていた
- b. Jane also found that she knew the woman behind the counter, **by sight at least** [...] (COCA)
 ジェーンは、また、カウンターの向こうに見える店員が知っている女性であることにも気がついた。少なくとも顔はわかる。
 [...]
- (11) その他⁴⁾
- a. To learn birds by sound, start with birds you **know by sight**. (COCA)

鳥の鳴き声を覚えたいと思ったら、まずは見た目がわかる鳥から始めましょう。

- b. Over the years, I'd had plenty of dealings in the shady side of life, so I **knew Slater by sight** and reputation.⁵⁾ (COCA)
 長年に渡り社会の闇とたっぷり関わってきた私であるから、スレイターのことは顔も評判も知っていた。

(11) の「その他」の例については（こうしたものを2節で扱っていないので）説明を補足しておく。(11a) では鳥の見た目 (sight) という側面が鳴き声 (sound) という側面と対比されている。(11b) では、スレイターの見た目 (sight) という側面と評判 (reputation) という側面が対比されている。鳥という動物およびスレイターという人物に見た目以外の側面があることを意識していることがはっきりと分かる。

このように、〈他面意識〉が分析者にとってはっきりと指摘できる（つまり、コーパスで確認できる範囲の文脈内に対比を示す要素が存在している）ような例が COCA には 53 例見つかるわけであるが、分析者にとってははっきりと指摘できないけれども話し手・書き手は〈他面意識〉を持って [S know O by sight] を使った例もあるはずで（次節の注 12 を参照）、それも含めると数はさらに増えることになる。したがって、COCA には〈他面意識〉と結びついた [S know O by sight] の使用例が少なくとも 53 例含まれている、という言い方が適切である。

そして COCA におけるこの（少なくとも）53 例という数は、慣習化が起こっていると考え得る数である。たとえば特に理由もなく朝から機嫌が悪いことを表す get up on the wrong side of the bed というイディオムは、多くの英和辞典および英英辞典に掲載されていることから、十分に慣習化しているものと言ってよいはずであるが、COCA でのヒット件数は 50 件程度である（wrong side of the bed の左 9 語以内に up が現れる件数は 53 件）。

本節では、[S know O by sight] の意味の一面として、O が sight (見た

目)以外の側面を持つという〈他面意識〉がかなりの程度慣習化していると考えられることを論じた。次節では、この〈他面意識〉が[S know O by sight]以外の by 表現にも見られるものであることを示す。

4. 〈他面意識〉は [S know O by sight] 以外にも

まず、〈他面意識〉は [S know O by name] にも見られるものである。『コンパスローズ英和辞典』(s.v. *name*) の提案する「〈…〉の名前は知っている」という訳語や *Collins English Dictionary*(13th Edition, s.v. *name*) の ‘to have heard of without having met’ という記述 (いずれも下線は引用者) は、O の知り得る (あるいは知るべき) 側面として name 以外の側面も存在するという意識を反映していると言えるだろう。COCA でも、by name の左9語以内に know (およびその活用形) が現れる例を検索すると、name が sight や face と対比されている例や、by name に only や at least の修飾がかかる例などを簡単に見つけることができる。以下にいくつか例を示す。

- (12) a. Joyce Swallow **knew** nearly all of them, if not **by name** then by sight. (COCA)

ジョイス・スワローはほぼ全員を知っていた。名前はわからずとも顔は知っていたのだ。

- b. He **knew** her—**by name** and by face [...]. (COCA)

彼は彼女を知っていた——彼女の名前を、そして彼女の顔を [...]。

- c. I **knew** him only **by name** [...]. (COCA)

私は彼のことを名前しか知らなかった [...]。

- d. When I walked inside, I realized that one of the acquaintances was there, seated with some other people I **know**, at least **by name**. (COCA)

中に入ると、その知人のうちの1人がいることに気付いた。他

の何人か——私にも少なくとも名前はわかる人たち——と一緒に座っている。

- e. Vaughn Rhomer **knew** it by melody, not **by name**. (COCA)
 ヴォーン・ロメルはその歌のメロディーは知っていたが、曲名は知らなかった。

すると、母語話者は [S know X by sight] と [S know X by name] から以下のように共通パターン [S know X by Y] を抽出し、頭の中にネットワークを構築している可能性がある。know の目的語部分を便宜上 O から X に変更し、sight と name に相当する by の目的語部分は Y と表記している。

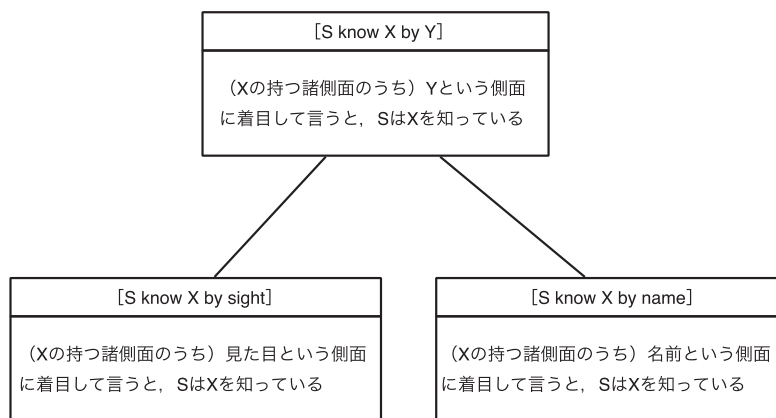


図 1 [S know X by Y] の抽出

[S know X by Y] の [by Y] と同じ [by Y] を含んだパターンは他に存在しないだろうか？ Dixon (2021) は by に以下のような用法があることを指摘している。

- (13) a. Stella is generous **by nature**

ステラは根が寛大なのだ

b. Jack **is** a lawyer **by profession**

職業でいうとジャックは弁護士である

c. Maria **is** French **by birth** and German **by residence**

マリアは生まれで言うとフランス人で、居住地で言うとドイツ人だ

d. This carving **is** of Roman origin **by repute**

この彫刻は、噂によれば、古代ローマで作られたものだという

(Dixon 2021: 145 ; 太字と日本語訳は引用者)

これらにおける **by** の意味・機能を Dixon は次のように記述している。

(14) Stating why a particular quality may be ascribed to a person (or thing)

(Dixon 2021: 144)

人(あるいは物)がある特定の性質を持っているとどうして言えるのかを述べる

この記述を具体例の (13a) に照らしてみると、**by** の意味・機能は、Stella が *generous* という性質を持っているとどうして言えるのかを述べることにあり、ということになる。**by** に続く *nature* (本来的に持っている性質) という名詞は、確かにその「どうして」に対する答えになっているように思われる。Dixon は間違ったことは言っていない⁶⁾。

しかし、(14) は (13) の例の共通性を十分に捉えきれていない粗削りの記述であると言わざるを得ない。まず、(13) の例はすべて [X is A by Y] という構造を取っている (be 動詞まで含めてパターン化していることは Lindstromberg (2010: 144) も指摘している)。Stella is generous by nature であれば、X は Stella に、A は generous に、Y は nature によって具現化されている。次に、(13) における [X is A by Y] の Y は、すべて、X の持

つ諸側面のうちの一面である。(13a) – (13d) の Y は、順に、nature 「本来どのような性質を持っているか」、profession 「どんな職業に就いているか」、birth/residence 「生まれた／住んでいるのはどこか」、repute 「評判はどのようなものか」であり、これらはそれぞれ Stella, Jack, Maria, This carving の持つ諸側面のうちの一面になっている⁷⁾。以上のことを踏まえると、(13) の例を抽象化して得られるのは次のような記述だと言わなければならない。

(15) [X is A by Y] (Y = nature, profession, etc.)

(X の持つ諸側面のうち) Y という側面に着目して言うと、X が性質 A を持っている

話者の頭の中ではこの抽象的なパターンが [X is A by nature] や [X is A by profession]⁸⁾ など具体的なパターンから抽出され、下図に模式的に示したようなネットワークが構築されると考えられる。

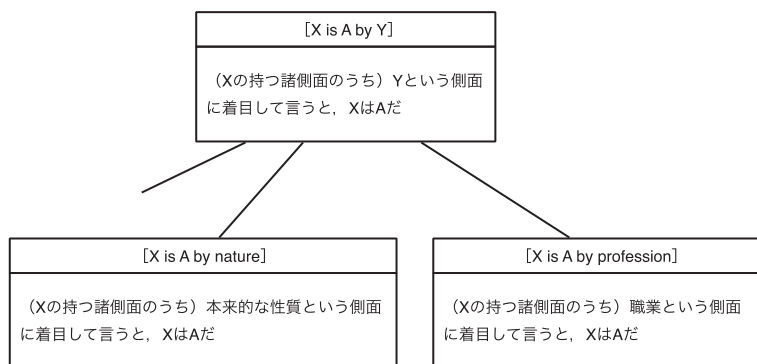


図 2 [X is A by Y] の抽出

なお、上の図には慣習化した表現のすべてが反映されているわけではなく、また慣習化の度合いも表現されていないが、Dixon の例に含まれているも

の 言 う と [X is A by nature], [X is A by profession], [X is A by birth]⁹⁾ は慣習的なパターンである。他には [X is A by trade] や [X is A by training] も完全に慣習化していると言ってよい。

ただし, [X is A by Y] の X に Y 以外の側面があることがどの程度意識されるか——〈他面意識〉がどの程度活性化するか——は, Y に入る名詞によっても, 文脈・場面によっても変動するものであることに注意されたい。たとえば, Dixon が挙げていないパターンであるが, [X is A by training] は以下の辞書記述にもある通り強い〈他面意識〉を含むかたちで慣習化した表現である。

(16) *by training*

(…の) 教育を受けた

He is an anthropologist *by training*.

彼は人類学者としての教育を受けている《◆今は別の仕事についていることを含む》。

(『ジーニアス英和辞典』第6版, s.v. *training*; 斜体は原文, 太字は引用者)

[X is A by training] は, 「どのような訓練を受けた人間か」という側面から X を描写する表現でありつつも, 「今どのような仕事についているか」という別の側面を強く喚起する——それが慣習化している——表現なのである。以下の (17a) も, シュルート一族が *trade* 「職業」の側面ではどうであるかと, *hobby* 「趣味」の側面ではどうであるかを, *by* 句の繰り返しという極めて明示性の高いかたちで対比するものであり, 〈他面意識〉のを最大限に活性化するものである (ここで Dixon の例 (13c) を再度参照されたい)。これに比べて, [X is A by nature] の場合, X に *nature* 「根っこの性質」以外の側面があるという見方・捉え方が喚起される度合いはやや弱いことが多いように思われる (例外については (19) 参照)。(17a) を (17b)–(17d) と比較してみよう。

- (17) a. Schrutes **are** farmers **by hobby** and traders **by trade**.

(*The Office*, Season 7, Episode 19)

シュルートルー族は趣味で農業をやっていますが、職業は商人なんです。

- b. I **am not by nature** a violent man, but these insults were more than I could bear.

(<https://www.britannica.com/dictionary/nature> ; 太字は引用者)

私は本来暴力的な男ではないのだが、こうも侮辱されるとさすがに耐えられなかったのだ。

- c. Howard: What's the matter, you chicken?

Sheldon: I've always found that an inappropriate slur. Chickens are not, **by nature**, at all timid. In fact, when I was young, my neighbor's chicken got loose and chased me up the big elm tree in front of our house.

(*The Big Bang Theory*, Season 3, Episode 2)

ハワード： どうした、このチキンめ。

シェルドン： 前から思ってたんだけど、チキンっていう中傷の仕方は不適切だよ。ニワトリっていう生き物は臆病なんかじゃ全然ないからね。実際僕は、子どものころ、逃げ出した近所のニワトリに家の前のニレの木の上まで追いかけられたことがあるんだ。

- d. Amy: So what are we doing here?

Jerry: Oh, you'll find out.

Amy: I don't know, you're acting very mysteriously.

Jerry: Well, I'm very mysterious **by nature**.

(*Seinfeld*, Season 5, Episode 3)

(<https://youtu.be/SYRpTwDzNQw?t=216>)

エイミー： で、何してるのよ。

ジェリー： いや、じきにわかる。

エイミー： どうだろう、今のあんたの行動、ほんとに謎だから。

ジェリー： 言っとくが、俺はもともと謎多き男なんだよ。

(17b) は(辞書の例文であり先行文脈が提示されていないが、推測するに)特定の侮辱にカッと成り暴力的な言動をしてしまった後の発話であろうから、話し手 X の根っこの性質としての非暴力的な側面と、特定の侮辱に反応してあらわにしてしまった(やはり話し手 X の)暴力的な側面との間の対比が存在する例と言ってよいだろう。この対比は but の存在によりかなりの程度気付きやすいものとなっているが、(17a) ほど露骨に側面と側面の対比という格好は取っていない。(17c) では、but のような明示的な逆接表現こそ使われていないものの、chicken が根っこの性質からするとどのような動物だと言えるかということと、chicken という語を人間に適用した場合どのような人物を指すかということが明らかに対比されている(Sheldon の発話は明らかに Howard に対する反論として機能している)。しかし、この対比を、「動物として持つ根っこの性質という chicken (X) の側面と、人間を指す言葉として使われたときにどのような人物を指すかという chicken (X) の側面の対比である」というふうに X の側面同士の対比と捉える見方・捉え方は、さほど強く活性化されない——少なくとも(17a) に比べると弱い程度しか活性化されない——ように思われる。(17d) では、話し手 Jerry (X) がいま謎の多い行動をしていることと、根っこの性質として謎が多いことが(本稿の用語法で言うところの)対比の関係に置かれていると言うことができ、ひいては、この対比は Jerry (X) の現時点の行動という側面と根っこの性質という側面の対比であると言うことができる。しかし、このように対比を見て取る見方と同等に自然な、いや、ひょっとするとそれ以上に自然な見方として、Jerry の現時点で

の謎多き行動は、単に根っこの性質としての謎の多さにより生じているだけのものである——前者は後者の側面の範囲内に収まるものであって独立した側面をなしているわけではない——という見方がありえる。この分だけ〈他面意識〉の活性化の度合いは弱まると考えられる。

このように、[X is A by Y] が〈他面意識〉を活性化させる程度は、強い (16) (17a) や弱い (17b)–(17d) など様々なのであるが、しかし弱い (17b)–(17d) でもゼロまではいかず、ある程度の〈他面意識〉の活性化が存在するというのがここでのポイントである。状況や文脈の観察から離れていくらか原理的に考えてみても、そもそも, by nature を言わずに I am not a violent man, but ... としてもほぼ同じ文意が伝達できるところをわざわざ by nature と言っている¹⁰⁾ のだから, nature 以外の側面の存在に対する意識がゼロであると分析するのはあまりに極端であろう。

さて、ここまで来れば、[S know X by Y] と [X is A by Y] の共通性は明らかである。[by Y] の部分が「(X の持つ諸側面のうち) Y という側面に着目して言う」との意味を担っているということである。このような〈他面意識〉の共通性が母語話者の頭の中で抽出されていると考えるのが妥当であることは、(i) [S know X by Y] の Y に現れやすい名詞がまれに [X is A by Y] の Y に現れることがあったり、逆に、(ii) [X is A by Y] の Y に現れやすい名詞がまれに [S know X by Y] の Y に現れることがあったりすることを見ると納得しやすいだろう。

まず (i) [S know X by Y] の Y に現れやすい名詞が [X is A by Y] の Y に現れるケースを見よう。[S know X by Y] の Y に現れやすい名詞とは sight と name である。これらの名詞が [X is A by Y] の Y に現れている事例としては次のようなものがある。(18) は [X is A by sight] の例、(19) は [X is A by name] の例である¹¹⁾。

- (18) Someone very close to me **is** “multi-racial” **by sight**, but they are adopted, estranged from adoptive family and never found out the

background, so they have absolutely no idea what their heritage is.

(COCA)

私がとてもよく知っている人に、見た目に関して言うと「多民族的な人」がいるのだが、その人は養子で、養子に取られた家の人たちと疎遠になり、自分の生い立ちを知るチャンスがなくなってしまったので、自分が生まれながらに受け継いだものというのが一体何なのか、まるで知らずにいる。

- (19) a. [状況説明] Max Verstappen という F1 レーサーの紹介。

He's Max **by name**, and max by nature.

(<https://www.formula1.com/en/drivers/max-verstappen>)

彼はマックス。名実ともにマックス。

- b. [状況説明] 猫による自己紹介という体裁の SNS 投稿。

Hello, I'm Brutus **by name** but not by nature. My foster mum describes me as 'a real gentleman'.

(<https://www.instagram.com/reel/Crex0fWMbCa/>)

やあ、僕はブルータス。名前がそうっただけで、中身は違うからね。里親ママが言うには「マジで紳士」なんだから。

(18) では、当該の人物が *sight* という側面では “multi-racial” であることと、系譜という側面では自らを何者とも理解していないことが対比されている。(19) では、当該の人物が *name* という側面かどうかということと *nature* という側面かどうかということが対照されている。

次に (ii) [X is A by Y] の Y に現れやすい名詞が [S know X by Y] の Y に現れるケースを見よう。[X is A by Y] の Y に現れやすい名詞とは、*nature* や *profession*, *birth* などである。(20) は [S know X by *nature*] の例、(21) は [S know X by *profession*] の例である。

- (20) He foresaw the change in her [...], so well did he know her now

[...]. Know her by mood and **know her by nature**. And come it did [...].
 (William Irish, *Waltz into Darkness*)

彼は彼女の変化を予見していた [...]。もはや彼女のことを知り尽くしていたのだ [...]。気分のこともわかる。根っこのところもわかる。そしてその変化は確かに訪れた [...]。

- (21) She seemed to have a date whenever she wanted one, at least three or four a week. I **knew them by profession**: “I’m seeing the pilot tonight,” she would say amid a cloud of hair spray, or, with a dismissive roll of her eyes, “The lawyer’s taking me to Sea Galley.”

(Jess Walter, “Mr. Voice”)

お母さんはいつでも思いのままにデートに出かけているようだった。週に少なくとも3回か4回は出かけていた。私は職業の名前で聞かされていた。「今日の夜はパイロットの人とデートなの」とヘアスプレーの霧のなかで言うこともあれば、呆れたように目を上にやって「弁護士の人がシー・ガリーに連れてくとか言ってんだけど」と言うこともあった。

(20) では、当該の女性の mood という側面と nature という側面が対比されている。(21) では語り手の母親のデートの相手の profession という側面以外の側面が明示的に示されているわけではないが、英語圏の文化に照らして考えると、デートの相手に言及する一番普通の方法は名前を出すことであるから、ここでの by profession は by name と暗黙の対比関係をなすと考えることができる¹²⁾。

(i) と (ii) のように Y の名詞を (慣習的なパターンと) 逆転させたような使用例が低頻度ながら見られることは、[S know X by Y] と [X is A by Y] の間に母語話者が共通性を見いだしていると考えれば説明がつく。

さらなる補強証拠として、ある英英辞典の ‘by reputation’ の項の記述 (立体) と例文 (斜体) を提示したい。

- (22) If you know someone **by reputation**, you have never met them but you have heard of their reputation.

know 人 by reputation しているというのは、その人と会ったことは一度もないのだがその人の評判を聞いたことがある、ということである。

She was by reputation a good organiser.

彼女は評判では企画がうまいとのことだった。

(<https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english/by-reputation> ; 太字と斜体は原文、下線と日本語訳は引用者)

by reputation の意味を記述する部分では [know X by reputation] を用い、例文では [X is A by reputation] を用いているのである。これは両者の構文において by reputation が担っている意味が同じであるという辞書編集者・項目執筆者の感覚が（意識的なものかは分からないが）反映されていると言えるだろう。

本節の議論は下図のようにまとめることができる。[S know X] と [X is A] の共通性を [... X ...] と表記することにして、[S know X by Y] と [X is A by Y] の間の共通性を [[... X ...] by Y] というかたちで捉えている。この非常に抽象的なパターンの意味は、「(Xの持つ諸側面のうち) Y という側面に着目して言うと、[...] だ」である。以下の図で点線で囲まれているボックスは（実線のものに比べて）慣習化が進んでいないことを示している。点線のパターンの実例には出会ったことがないという話者がいてもおかしくない。それでも [[... X ...] by Y] という最も抽象度の高いパターンの知識に十分到達しうる。

このように、〈他面意識〉を意味に含む [S know X by Y] は英語の体系における特殊な離れ小島のようなものではなく、こうしたネットワークの中に位置付けられるものなのである¹³⁾。

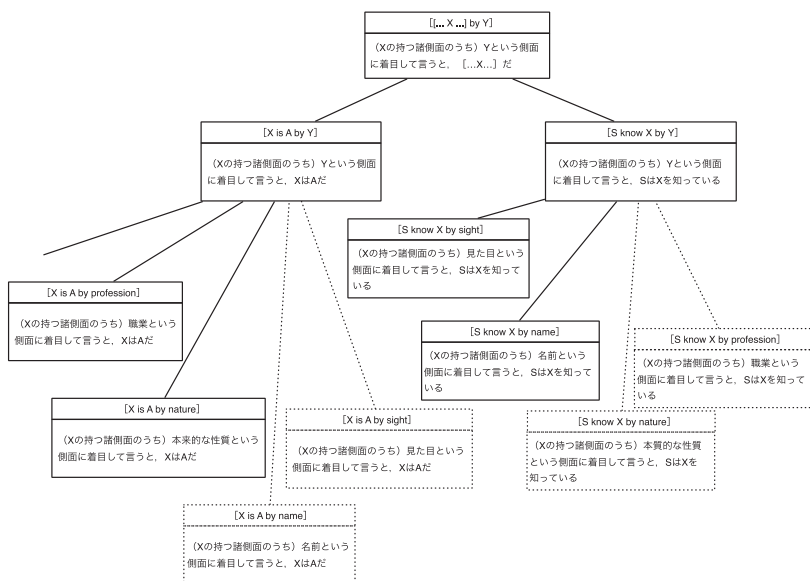


図3 [[... X ...] by Y] の抽出

5. 結語

平沢（近刊）と本稿という2本の論文（以下、2本合わせて「本稿」）にわたり記述してきた [S know O by sight] の意味をまとめよう。フレーズを構成するパーツの組み合わせり方まで含めて (23) のように示すことができる。

(23) a. S [[_{静的} [know_{動的} O]] by 「…の点では」 sight_{見た目}]

S は、(O が持つ諸側面のうち) 見た目という側面について言えば、知覚領域に入ってきた人や物を正しく O として認識するという動的な変化を起こすことができるだけの知識・能力を持ってい

る状態である

b. S [静的 [know 動的 O by 手段 sight 見た目]]

Sは、Oの見た目を手段として、知覚領域に入ってきた人や物を正しくOとして認識するという動的な変化を起こすことができるだけの知識・能力を持っている状態である

c. S [静的 [know 動的 O by 手段 sight 視覚・見る行為]]

Sは、Sの視覚あるいは見るという行為を手段として、知覚領域に入ってきた人や物を正しくOとして認識するという動的な変化を起こすことができるだけの知識・能力を持っている状態である

本稿では、この結論を導き出す道筋の中で、可能な限り言語学の術語を用いず、平易なことばを用いるように心がけた（つもりである）が、締めくくりとして、関心ある読者のために言語理論との関わりについて簡単に触れておきたい。実は本稿の背後には常にある特定の理論があったのである。それは、アメリカの言語学者 Ronald W. Langacker の創始した**認知文法 (Cognitive Grammar)** である。

たとえば、細かいところで言えば、[S know O by sight] の by を〈手段〉と解釈する場合、知覚領域に入ってきた人や物を正しくOとして認識することは（〈手段〉と対を成す）動的な〈目標〉にあたるわけであるが（平沢近刊；5.1 節）、これは、人間が認知文法で言うところの**認知的コントロールの追求 (striving for epistemic control)** (Langacker 2009a, 2013, 2022) を常に行なっているということを背景として理解されるべきことである。

また、[S know O by sight] の know の（少なくとも表面的には一番際立っている）静的な意味の背後には動的な意味が潜んでいるという分析は、Langacker (2009b) の**静に潜む動**という発想に依るところが大きい。

そして、know が (23a) のように「静」として by sight の修飾を受けることも、(23b) のように「動」として by sight の修飾を受けることも

できるという分析は、認知文法で言うところのプロファイリング (**profiling**) (Langacker 2008: 3.3.1) の柔軟性という観点に基づくものである。Langacker (2015) の挙げる以下の例で、同じ **park** という動詞が、副詞句による修飾を「動」として受けたり「静」として受けたりするさまを見てみよう。

(24) a. She parked the car in a jiffy. (Langacker 2015: 126)

彼女はその車をシュッと停車させた。

b. You can park here for two hours. (*ibid.*)

ここは2時間駐車OKですよ。

(24a) の **park the car** は車が駐車されていない状態から駐車されている状態への動的な変化を表し、その変化が **in a jiffy** 「あっという間に、シュッと」により修飾されている。**park the car** の動的な側面が前に出て、その動的な側面が **in a jiffy** により特徴づけられているのである。しかし **park the car** は、動的な側面が前に出ているといっても、その変化の結果状態がしばらく持続する(車がしばらくその場所にあり続ける)という静的な面も背後に有している。Langacker (2015: 127) はこの **park** の意味を模式的に '**put (and keep) in place**' と表記する。太字の **put** は前面に出ていることを、**and keep** のカッコは背後に潜んでいることを擬似的に示している。一方、(24b) ではこの **keep** という静的な側面が前面に出ており、それが **for two hours** の修飾を受けている。この **park** は '**(put and) keep in place**' と表記される (Langacker 2015: 127)。認知文法はプロファイルと活性化領域 (**active zone**) (Langacker 1984) の間のずれ、およびプロファイル同士の間のずれ(狭義のメトニミー)という2種類のずれの両方を含めた広義のメトニミー (Langacker 2015: 126–127; 坪井 2020: 26–28) を文法の根幹を支えるものと考えているが (langacker 2009a: Chapter 2), 本稿の (23a) (23b) はまさにそのような文法観の中に自然なかたちで位置付けられる分析である。

本稿全体に影響を与えている概念としては、まず、「**カテゴリー化 (categorization)**」(Langacker 2005: 115–117; Langacker 2008: 228–230; Taylor 2003)を挙げることができる。本稿で明示的に採用している萩澤・氏家(2022)の「リンク発見」という概念はこの「カテゴリー化」(のある重要な側面)を捉えたメタファーである。

また、[S know O by sight] のパーツ分解のあり方を [S know O by sight] の意味の一面に含める筆者の立場は、意味を非常に多面的なものとして捉え(Langacker 2008: 30 [2012: 192] など)複合的な表現の**分析可能性 (analyzability)**(Langacker 1987: 8.2.2)や**合成経路 (compositional path)**(Langacker 1991: 3.3.2; Langacker 2008: 61–62)をもその表現の意味の一面とみなす認知文法の意味観と整合的である。

さらに本稿は、パーツ分解的理解の仕方が異なる話者間で [S know O by sight] を用いたコミュニケーションが問題なく成立することを前提としているが、これは認知文法が(意味を多面的なものとして捉えることの反映として)表現間の意味の差異に敏感である一方で、実際のコミュニケーションにおいて意味の差が無視されうる(意味が微妙に異なる複数の表現のうちどれを使っても実質的な問題が生じない場合がある)ことを認めている(Langacker 1991: 522; Langacker 2008: 82, 443)ことと対応している。

4節では、〈他面意識〉を意味に含む [S know X by Y] は英語の体系における特殊な離れ小島のようなものではなく、関連した様々な表現のネットワークの中に位置付けられることを指摘した。これは、[S know X by Y] が**生態的地位 (ecological niche)**を与えられているという意味で動機づけられている(motivated)(Taylor 2004)ことを示したに等しい。このように様々な表現の織りなす生態系における位置付けを論じることは、認知文法が採用する**使用基盤モデル (usage-based model)**(Langacker 2000; Langacker 2009c; Tomasello 2000)の観点からすれば、ある慣習的な表現の意味を十全に記述することの必然的な一部として含まれるものである¹⁴⁾。

最後に、筆者は本稿で一貫して認知文法で言うところの「**排他の誤謬**」

(**exclusionary fallacy**) (Langacker 1987: 1.1.6 節) を避けるかたちで記述を提示してきた。(23) の3つの理解の仕方は英語母語話者の理解の仕方としてどれも十分にありえるものであり, [S know O by sight] の意味記述として, このすべてが正しいものとして受け入れられるべきであると主張した。Langacker (1987) は次のように述べている (例文番号は本稿に合わせて変更している)。

I must [...] deny the assumption that a single analysis is necessarily valid to the exclusion of all others (this assumption is one manifestation of the exclusionary fallacy). Consider the examples in (25). Analyzing the *out* in (a) as pertaining to the removal of wrinkles from the fabric, parallel to its interpretation in (b), is not considered incompatible with the claim that it also expresses the lengthening of the fabric, as in (c), and possibly even the motion of the girl's hand away from her body, on the model of (d).

正しい分析が必ずただ1つ存在し, その分析により他のすべての分析が排除されるという想定は誤りであるとはっきりとっておく必要がある (この想定は排他の誤謬の現れ方の1つである)。(25) の例を見よう。(a) の *out* は布からしわを除去することを表すというふうに, (b) の *out* の解釈と類似した分析を採用したからといって, この *out* は (c) と同じように布を伸ばすことをも表しているという主張や, さらには (d) とのアナロジーで少女の手が体から離れていく動きをも表してもいるという主張と矛盾することを述べたことにはならない。

(25) (a) *The girl smoothed out the fabric.*

少女は布のしわを伸ばした。

(b) *The detergent got out all the spots.*

この洗剤のおかげで染みが全部取れた。

- (c) *We stretched out the carpet.*
 私たちはカーペットを広げた。
- (d) *I reached out my hand.*
 私は片手を伸ばした。

Each interpretation represents an established pattern of English grammar, and there is no evident reason for contending that one necessarily holds sway to the total exclusion of the others [...] .

どの解釈も英語の文法の確立したパターンに沿ったものであるから、ある1つの解釈が残りの解釈を完全に排除するような支配力を必然的に持っているとは主張する明確な理由は何もないのである。

(Langacker 1987: 54-55; 斜体原文, 日本語訳は筆者)

こうした姿勢が言語表現の記述・分析をいかに面白く、やりがいのあるものにしてくれるかを示すことに、[S know O by sight] の意味をめぐる本稿の議論が少しでも貢献できていれば幸いである。

Notes

- * 本稿は應義義塾大学 2024 年度講義「前置詞研究」の内容の一部をまとめたものである。適切な質問やコメント、修正案を寄せてくださった磯部傑貴君、伊野波盛彦君、澤永拓哉君、中岸岳也君に感謝したい。原稿に関して助言をくださった西村義樹先生、松田俊介氏、野中大輔氏、萩澤大輝氏にもこの場を借りて感謝を申し上げる。
- 1) 本稿では、平沢 (2022) と同様に、異なる二者に注目して比較を行なう場合を広く「対比」と捉えることにする。たとえば「甘口の日本酒は好きだが、辛口のは苦手だ」という文でも「日本酒は甘口も辛口も好きだ」という文でも、甘口の日本酒と辛口の日本酒という異なる2種類のものに注目して比較がなされているため、2種類の日本酒が「対比」されていることになる。その比較により「好き／嫌い」という正反対の結果が導かれるか、「好き／好き」という同じ結果が導かれるかは、本稿の用語法では、対比であるかどうかを左右するファクターではない。
 - 2) 「ノイズ」の内訳は、by sight が know 句を修飾していないもの (1件)、

know の目的語が「…かどうか」の if 節であり by sight が「視覚（あるいは見るという行為）により」という意味のみを担っていることが明確であるもの（1 件）、through thought 「思考によって」との対比などにより by sight の解釈として「見た目の点では」よりも「視覚（あるいは見るという行為）により」の方がはるかに際立っているもの（2 件）である。

- 3) COCA でのジャンル表示は MOV となっており、映画の実例であることが示されているが、検索結果では以下の通りどこで発話者が変わるのかが分からない形式になっていた。

What you got on the freighter homicide? I talked to some illegals. They only knew the shooter by sight.

そこで (9a) では引用元の映画 (*Lethal Weapon 4*) を確認することで得た発話者の情報を補っている。なお、その過程で、映画で実際に発話されているセリフは COCA で表示されるものと若干異なっていることが判明したので、以下に実際のセリフを記しておく。

Riggs: What you got on the freighter homicide thing?

Butters: I'm all over it. Now I talked to some illegals. Turns out they only knew the shooter by sight. (映画 *Lethal Weapon 4*)

- 4) 本文ではわかりやすさを優先して、〈他面意識〉の活性化が明確である例を選んで提示しているが、実際には〈他面意識〉の活性化の明確さは程度問題であり、以下のように、そう明確でない例も存在する。

[状況説明] 夫とうまくいっていない 57 歳の Carol が 1 人で車中泊していると、ある家の庭で犬と戯れている女性の声で目を覚ます。

It was a neighborhood where Carol and her husband used to take walks, and, though she **knew this yard by sight**, the red flowers, the decorative stone animals, and the twirling little ornament in the shape of a star looked eerie and foreign in the dawn light. (COCA)

そこはキャロルがよく夫と一緒に散歩をしていた区域だった。この庭は見慣れていたけれど、赤い花、動物の置き物、くるくる回る小さな星型の飾りが夜明けの光の中で不気味で異質なものに見えた。

この例では、当該の家の庭のいつもの見た目と、この車中泊の日の朝の見た目が対比されているのである。[S know O by sight] の sight が「(O の) 見た目」と解釈される場合に、その「見た目」がいつもの見た目と解釈さ

- れることについては、平沢（近刊；3.1節）を参照されたい。
- 5) sight と reputation が and で並列されているこの例が「対比」の事例としてカウントできることについては注1を参照されたい。
 - 6) 一方、Cuyckens (1999: 26) は I am an optimist by nature. という例の nature は「原因」を表していると分析している。つまり、本来的な性質が原因として作用し、話し手が楽天的であるという状況を引き起こしているという分析である。Dixon の分析と Cuyckens の分析はどちらも正しいと考えるべきだろう。正しい分析はただ1つしかないという考え方を否定する議論は平沢（近刊）および本稿「結語」を参照されたい。
 - 7) Dixon はこの例文のセットにもう1つ、以下の文を含めている。

My brother is related to the Duke by marriage

この英文が言っているのは、(i) 話し手の兄／弟の結婚相手が公爵と血縁関係にあるか、または、(ii) 話し手の兄／弟が公爵の結婚相手と血縁関係にあるということである。いずれの解釈も、by が〈受動態の動作主〉を導く用法で用いられている（より正確には、〈受動態の動作主〉と〈介在物〉[平沢2019：第4章]が渾然一体となったものを導く用法で用いられている）という文法的解釈によりカバーされる。この例を、(13a)–(13d)と同様の文法的解釈で読むことは可能だろうか？ つまり、「my brother は、my brother が持つ marriage という側面に着目して言うと、related to the Duke だ」のように読めるだろうか？ (i) の解釈では、marriage を「姻戚関係」と考えれば、このような読みが可能であると言える（それでも marriage が「姻戚関係」を表すのはおそらくこの be related to … by marriage というフレーズに限られることに注意が必要である）が、(ii) の解釈ではこのような読みはほとんど不可能だと言ってよいだろう。というのも、(ii) の解釈では、問題の結婚関係は the Duke と誰かの間での結婚関係であり、my brother の結婚関係は文意の中に入っていないため、marriage が my brother の一側面とは言えなくなるからである。こうした理由から、この例は (13) のセットから除外することにした。

- 8) Copperud (1980: 306) は、by profession について、*By profession is often used redundantly, as in “He is an architect by profession. A descriptive of this kind is called for only when a distinction is made, as in “He is an architect by profession and an artist by avocation.”* (by profession はよく He is an architect by profession 「彼は職業で言うと建築家だ」のように冗長なかたちで用いられる。この種の表現の仕方が必要になるのは、たとえば He is an architect by profession and an artist by avocation. 「彼は職業で言うと建

築家なのだが、好きでやっているのは芸術だ」のように、何らかの区別がなされる場合である。)と述べている。

- 9) ‘If, for example, you are French **by birth**, you are French because your parents are French, or because you were born in France.’ (<https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english/by-birth>; 太字原文)「たとえば be French by birth である人とは、両親がフランス人であるという理由、あるいは本人がフランス生まれであるという理由によりフランス人であるような人のこと」。
- 10) Copperud (1980: 306) の *By profession* is often used redundantly という記述はこれと同趣旨の指摘と捉えられる (注 8 参照)。
- 11) [X is A by name] は慣習化の進んでいないパターンであるが、以下のように [X is] の部分が表現されないパターンは非常に高頻度であり完全に慣習化していると言ってよいものと思われる。
- (i) What he didn’t know was that the ambitious Mr. Barkley had hired a private detective, Charlie Leach by name, to check on Darrin’s background and mine.
(*Bewitched*, Season 2, Episode 31)
彼が知らなかったのは、野心家のバークレーさんがダーリンと私の素性を調べるためにチャーリー・リーチという名前の私立探偵を雇っていたということです。
- (ii) [...]Starr has a teenage son still living at home, Matt by name[...] (COCA)
[...] スターには、マットという名前の、依然実家暮らしのティーンエイジャーの息子がいる [...]
- (i) の a private detective, Charlie Leach by name は a private detective, who was Charlie Leach by name, (ii) の a teenage son still living at home, Matt by name は a teenage son still living at home, who is Matt by name ということである。
- 12) 前節で [S know X by sight] について「分析者にとってははっきりと指摘できないけれども話し手・書き手は〈他面意識〉を持って [S know O by sight] を使った例もあるはず」と書いたが、(21) はまさにそれが [S know X by profession] に関して起こっている例である。
- 13) このネットワーク全体が、さらには, by を含む表現に限定されないより広い対比表現のネットワークの中に位置付けられる可能性がある。以下の例を見られたい。

- (i) I'm a Londoner, born and bred.
(https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/born_1)
- (ii) I enjoyed boxing but I was never good enough to go professional.
(https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/professional_1)
- (iii) He looks scary but he's really a gentle giant.
(<https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/gentle>)
- (iv) He had his father's good looks and his mother's good nature.
(<https://www.ldoceonline.com/dictionary/good-nature>)

(i) は生まれと育ち, (ii) は趣味と仕事, (iii) と (iv) は見た目 (印象) と性格を対比したものである。生まれや仕事, 見た目といったものが (by とともに用いられる名詞によって表現されているかどうかに関係なく) そもそも何かと対比されやすい可能性があることが示唆される。以上は野中大輔氏の指摘 (私信) による。

- 14) 生態系に着目した「説明」は「説明」になっていないという反論 (特に, 認知文法は機能主義言語学のはずであるのに機能的な説明になっていないという反論) もあるが, これはある種の誤解に基づくものと思われる。稿を改めて論じたい。

参考文献

- Copperud, Roy H. (1980) *American usage and style: The consensus*. New York: Van Nostrand Reinhold.
- Cuyckens, Hubert (1999) Historical evidence in prepositional semantics: The case of English *by*. In: G.A.J. Tops, Betty Devriendt and Geukens, Steven (eds.) *Thinking English grammar: To honour Xavier Dekeyser, Professor Emeritus* (Orbis Supplementa 12), 15–32. Leuven: Peeters.
- Dixon, R. M. W. (2021) *English prepositions: Their meanings and uses*. Oxford: Oxford University Press.
- 萩澤大輝・氏家啓吾 (2022) 「リンク発見ゲームの諸相: 「記号が存在する」というフィクションを超えて」『東京大学言語学論集』44: 1–18.
- 平沢慎也 (2019) 『前置詞 *by* の意味を知っているとは何を知っていることなのか: 多義論から多使用論へ』東京: くろしお出版.
- 平沢慎也 (2022) 「「自分で」を表す *for oneself*: 「自分のためになる」の意味を含むというのは本当か」『東京大学言語学論集』44: e15–e46.

- 平沢慎也（近刊）「S know O by sight の意味：この by は〈手段〉か非〈手段〉か」『教養論叢』146.
- Langacker, Ronald W. (1984) Active zones. *Proceedings of the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 172–188.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1: *Theoretical prerequisites*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2: *Descriptive application*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1993) Grammatical traces of some ‘invisible’ semantic constructs. *Language Sciences* 15(4): 323–355.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, 1–63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2005) Construction grammars: Cognitive, radical, and less so. In: Francisco J. Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.), *Cognitive linguistics: Internal dynamics and interdisciplinary interaction*, 101–159. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009a) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2009b) Reflections on the functional characterization of spatial prepositions. *Belgrade English Language & Literature Studies* 1: 9–34.
- Langacker, Ronald W. (2009c) A dynamic view of usage and language acquisition. *Cognitive Linguistics* 20: 627–640.
- Langacker, Ronald W. (2012) Linguistic manifestations of the space-time (dis) analogy. In: Luna Filipović and Kasia M. Jaszczolt (eds.), *Space and time in languages and cultures: Language, culture, and cognition*, 191–215. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2013) Modals: Striving for control. In: Juana I. Marín-Arrese, Marta Carretero, Jorge Arús Hita and Johan van der Auwera (eds.), *English modality: Core, periphery and evidentiality*, 3–55. Berlin and Boston: De Gruyter Mouton.
- Langacker, Ronald W. (2015) Construal. In: Ewa Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), *Handbook of cognitive linguistics*, 120–143. Berlin and Boston: De Gruyter Mouton.

- Langacker, Ronald W. (2022) What could be more fundamental? In: Karolina Krawczak, Barbara Lewandowska-Tomaszczyk and Marcin Grygiel (eds.) *Analogy and contrast in language: Perspectives from cognitive linguistics*, 15–46. Amsterdam: John Benjamins.
- Lindstromberg, Seth (2010) *English prepositions explained*. Revised edition. Amsterdam: John Benjamins.
- Taylor, John R. (2004) The ecology of constructions. In Günter Radden and Klaus-Uwe Panther (eds.), *Studies in linguistic motivation*, 49–73. Berlin: Mouton.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic categorization*, 3rd edition. Oxford: Oxford University Press.
- Tomasello, Michael (2000) First steps toward a usage-based theory of language acquisition. *Cognitive Linguistics* 11(1): 61–82.
- 坪井栄治郎 (2020) 「認知文法」坪井栄治郎・早瀬尚子 『認知文法と構文文法』東京：開拓社.

コーパス・辞書

- Davies, Mark. (2008–) *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*. Springfield: Merriam-Webster, Incorporated. 2008.
- 『ウイズダム英和辞典』（第4版）三省堂。[物書堂アプリ版]
- 『コンパスローズ英和辞典』 研究社。[物書堂アプリ版]